１．た・づ・な

『ローマの郷愁』

馬事文化財団　馬の博物館

学芸部長　末崎　真澄

東西の文明史を考えるとき、人と馬との結びつきを触れずに語ることは出来ない。運搬や乗馬は歴史上、五千年以上も前から行われていたことであり、文明の興亡に馬は重要な役割を果たしてきた。しかし今日では運搬手段の発達と農業の機械化によって、日常生活や農村の風景で働く馬の姿を見る機会はほとんど失われてしまった。幸い馬にとっては、戦場や運搬作業の使役から解き放たれたのである。現在ではスポーツやレジャーのパートナーとしての活躍の場が広がり、日本ではレジャーとしての国民的な支持を得ている競馬が最大の活躍の場となっている。

日本の競馬は、古くは奈良時代以前に始まったことがわかっており、今も京都の上賀茂神社などで神事として行われている。これは西洋式競馬に対して和式競馬とも呼ばれるものである。これに対して現在の競馬は横浜に始まり、幕末から明治にかけて西洋式競馬が組織化されたものである。その西洋式競馬のルーツを辿っていくと、ヨーロッパ文明の精神的な基礎となった古代のギリシャやローマの競馬に行き着いてしまう。競馬を大規模に組織し、競馬の開催を目的としたヒッポドローム（競馬場）を建設したのはギリシャ人が最初であった。ギリシャはオリンピック発祥の地としても知られ、オリンピアで開催されるオリンピック種目に紀元前６８０年の第２５回オリンピックから４頭立二輪戦車競走が加えられ、紀元前６４８年第３３回オリンピックには競馬も加えられたのである。

ローマは、以前から競馬を行っていたエトルリア文明からその伝統を受け継ぎ、もともと神事であった競馬を、帝政時代には皇帝が主催する国家的な行事として開催した。紀元前６世紀に建設されたローマのキルクス・マクシムス（大競走場）は、長さおよそ６００㍍、幅１５０㍍から成る一周１,５００㍍の走行コースであった。走路は、同時に１２台の戦車が発走可能なだけの広さがあり、各レース４－６台の戦車が出走し１日１０－１２のレースが組まれ各レースとも７周した。こうした一大興行の競馬を行うには、政府の行政官、そしてファ

クティオと世ばれる利益共同体があり、騎手・飼育者・調教師・監督者・厩舎管理人・獣医師・馬具職人など２００－３００人から成っていた。ファクティオは熱狂的なパトロンを持ち、互いに勢力を競った。競馬はコロッセウムの闘技と共に大変人気があり、競馬場もカエサルの頃から建築技術の発達と共に整備され、トラヤヌス帝及びコンスタンティヌス帝の頃には、実に２５万人の観衆の席が設けられた。その競走の興奮の様子や記録は、碑文等から知ることができる。２４年間で４,２５６回に出場したアプレイオス・ディオクレス、賞金獲得王のムーア人のクレセンスなどが知られている。また名馬として名高い牡馬アクイローは、牽引した戦車が１３０回も勝利している。こうした活躍した名馬の育成や調教を記したものは少ないが、乗馬術や馬の手入れについては、ギリシャのクセノフォンの「馬術方法論」があり、古代オリエントの王国ヒッタイト、ミタンニ、アッシリアなどでも日常の馬の手入れの方法などが粘土板に記されている。

　またローマ時代の遺跡からも、当時の育成の様子を垣間見ることが出来る。以前に調査で、ローマの郊外アッピア街道沿いのボヴィエラを訪れたことがあった。ここには小さなキルクスの遺跡があり、このキルクスは馬飼育場に属していたもので、１２台の戦車が発走できる一種の練習場であったと思われる。戦車競技では、折り返し点で円柱を左に回るため、左側の馬には特に注意を要し、騎手と馬は普段から呼吸を合わせる事が大事であった。従って豊富な経験と技術を身につけるためのトレーニング施設として使用し、戦車用馬を訓練したものと考えられる。こうした施設が、馬の育成場近くにはあり、そこに古代の産地として知られたイタリアのシチリア、ギリシャのテッサリア、トルコのカッパドキア、北アフリカのカルタゴ産などの駿馬が飼養された。その後手をかけた育成、調教を経て、競走に出場する技術・能力検査を行い、晴れの舞台に出場したのは昔も変わりはなかった。